

も、本書との付き合い方ではなかるうか。

本書は、全体として、新分野への開拓的とりくみを行った労作であり、それが体系的の不足にもつながっていると思われる。例えば医療小説の次の章に健康づくり政策、その次の章は温泉という配列なども、問題の広さを反映するとともに、理論的整理の余地を示すものであろう。

最後に外国語の誤記がやや気になった。一二四頁 (Kultur-
eren → Kulturieren) / 一二六頁 (preventive → preventative) /
一二九頁 (Lebensformen → Lebensformen) / 二〇五頁
(Hygienische → Hygienische) / 二〇七頁 (Umbelt →
Umwelt) / 二〇八頁 (Arbeitsfahrt → Arbeiterwohlfahrt)。
ht)。

(日野 秀逸)

〔大修館書店、千代田区神田錦町三二二四、電話〇三―三二九
四―二三五九、平成十年二月十日、A五判、二四六頁、定価
二四〇〇円〕

芝木 秀哉 著

順天堂経験

——嘉永年間に於ける日本の医療の実録

關 寛齋〔文政十三年(一八三〇年)―大正元年(一九二二
年)〕は、十八歳から四年間佐倉順天堂の学僕として調剤や
診療助手などしながら臨床を学んだ。徳島の蜂須賀侯の侍医

となった彼は、戊辰戦争のとき三八歳で官軍奥羽出張病院頭
取(野戦病院長)を務めた。順天堂経験と題した三三疾患
(三六症例)の診療記録から、彼自身の経験と城舜海の処方な
ど当時の医学水準と蘭学塾の医学教育を伺い知る事ができ
る。

解題には師の佐藤泰然の人となり、塾での医学教育、そし
て寛齋の生涯と松本(良順(泰然次男)、佐藤尚中らとの交
友をかいま見る。

維新後徳島で開業したが明治六年に禄を返上し、平民の開
業医關 寛(せき ひろし)となった。彼は貧者を救済して
栄達を望む事なく北海道開拓に骨を埋めた。明治三十五年
(七十二歳)資産を処分し、北海道陸別で困苦に耐えて開農場
を開き自作農育成に務めたが、大正元年(一九一二)阿片丁
幾を服して自らの命を断った。八十二年の苛烈なる生涯で
あった。

芝木氏は順天堂大学所蔵の佐藤恒二本(全文翻刻)と、田
中蔵書印のある順天堂外科実験(experience)である。experi-
mentではない)と比較対照された。本編の参考文献のほかオ
ランダ度量衡単位の記載も行き届いている。長崎で軍陣医
学・海軍伝習を学んだ寛齋の肖像と原本、慶応四年(九ヶ月
間)の病院日記(ともに自筆)、ハイステルの肖像とそのオラ
ンダ語の外科書・手術器械図なども載せてある。

第一例 排尿困難。(ゴム製カテーテル挿入を繰り返した
が排尿なく、膀胱穿刺を行った。入門三年生の寛齋は泰然の

助手を務めた。甘汞、ジギタリスなどが処方されている。

第二例 肺炎が急性増悪し呼吸・循環障害で死亡した例である。何が問題であったのか、塾生たちは病理解剖の必要性を示唆している。

第十三例 「ケイゼルレーキスネチヲ」は嘉永五年（一八五二）大宮の伊古田純道の本邦第一例の帝王切開について報告しているが、寛齋自身の症例ではない。

第十六例（腹腔） 内部に発する大瘍Ⅱ虫垂炎より盲腸周囲炎をおこした十三歳少女の症例。刺絡で八オンスの血を取り、患部にヒル五十匹をあて血を吸わせて切開排膿、一時は発熱して脱水、衰弱したが十一日で膿は減少し治癒せしめえた。

第二十例 泰然が執刀した乳癌（二五歳、四三歳、六十歳、四十歳）四症例。何れも麻酔の記載もなく、阿片投与の記載もない。「手術の間患者痛苦するの景況は甚しからず（ママ）：華岡者流の大毒性なる麻薬をもちうるの愚をさとる：術後三時間安眠し覚めて飯を喫すること常に異ならず」とある。麻酔なしの手術に驚愕する。

索引には人名のほか普段使い慣れた語彙や医療器具、薬剤、あるいは書籍を記載されている。あとがきには陸別町齋藤省三氏が資料を貸し出された事に謝辞を述べ、また医史学会中西淳朗先生、二宮陸雄先生の示唆に富む提言を載せられた事を付記する。

（藤田 俊夫）

〔KK 東神堂、東京都千代田区神田司町二一十四、電話〇三—三二五二—一七六一、平成十二年九月、二一九頁、三〇〇円〕

浅野 弘毅 著

『精神医療論争史』

日本神経学会は一九〇二年（明治三五年）に創立されて、それが改称された日本精神神経学会は間もなく一〇〇周年をむかえる。西説による精神病学の本格的なものは、一八八六年（明治一九年）に榊俣が帝国大学医科大学で最初の精神病学講義をした時にはじまるとすると、一五年の歴史を有することになる。一方、敗戦からすでに五六年、戦後史は精神科医療史の半分をしめている。だが、精神科医療においても戦後史は充分にとのえられてはいない。

浅野さんの『精神医療論争史』は、「わが国における「社会復帰」論争批判」と副題されている。これは『精神医療』誌（批評社）に一九九二年から二〇〇〇年にかけて、この副題を題として一六回にわたり連載されたものである。仙台市デイケアセンターで精神疾患をもつ人のリハビリテーションに従事するなどの実践の立ち場から、「社会復帰」に関する重要論争を批判的にまとめているのが、本書である。

浅野さんはまず、「リハビリテーション」の語が一般的になっているいま、ふるい「社会復帰」の語をなぜつかうのか、